哲学自主研究発表会の学生・生徒による実践と探究コミュニティの創出に関する試論

Research events on philosophy that students practice based on their own interests and emergence of community of inquiry

土井 裕人（筑波大学人文社会系）

【要旨】

本稿の目的は、大学生による哲学の自主研究発表会を事例として取り上げ、高大連携やオンラインへの展開も含めて検討することで、哲学をテーマに自主的な研究と共有を行うコミュニティやその仕組みを構築する可能性と意義について考察する。そこからは、「楽しみ」を伴った思索を深め、自らの探究を他者と共有する体験が、知を愛して生きるという哲学の本来的な方向へと人を導く今日的実践として意味を持つことが示唆されよう。

This article aims to discuss the possibility of building a community and framework for research and sharing on the theme of philosophy based on one's own interests. For this purpose, I will focus on a case study of a research presentation on philosophy conducted by university students based on their own interests and examine its development to include high school-university collaboration and online. The process shows that the experience of sharing one's own inquiry with others, as well as deepening one's thinking with joy, has meaning as the original practice of philosophy, which is to live in love with wisdom.

【キーワード】

拡張された対話、高大連携、科学コミュニケーション、知の飛び火

Expanded dialogue, High school-university collaboration, Science communication, Light of wisdom kindled by a leaping spark

1． はじめに

哲学の探究を教室における単なる知識の習得でなく主体的なテーマに基づく実践として行うにあたって、学生や生徒の自発的な問題意識を引き出し、一方的な教示ではない相互の対話へと伸長させていく必要があるのは言うまでもない。しかし、その実現は対話を重視した哲学の実践が広まりを見せる昨今でも容易でないのも確かであろう。学校での哲学の実践としてマシュー・リップマンの「子どものための哲学」のようなスタイルもある一方で、特に大学の場であれば、哲学の主要なテーマをめぐる探究にとどまらず、他の学問領域にも拡がる実践の場が生み出される必要もあると考えられる。すなわち、実践としての哲学が、思考の訓練やよき市民としての資質の涵養、よき生き方の提示といった領域だけでなく、より広い領域に接続されるあり方も模索されてよいのではないだろうか。

そこで本稿では、大学生や高校生による哲学の自主研究発表会を事例に、哲学の実践に属する営みから、その研究・探究と共有を行うコミュニティや「場」を構築することについて、またそれを何が可能としうるか考察することを目的とする。そのため、この第 1 節に続いて、第 2 節では筆者が勤務する大学において学生の自主的な取組として立ち上がった哲学自主研究発表会について、とりわけコミュニティ形成やその運営面について検討し、第 3 節ではその展開としての高大連携の取組について述べる。そして、第 4 節において哲学のみならず他の学問領域にも「飛び火」したこれら取組についてプラトンの哲学という観点を含めて考察することで、哲学の実践から端を発する研究・探究のコミュニティないし「場」をいかに中高等教育で構築するかというテーマについて考察を行いたい。

2． 学生による哲学自主研究発表会とその特徴

2.1. 第 1 回開催に至るまで

この取組の発端は、2017 年 12 月に遡る。筆者の勤務校では他大学での一般教養科目に相当する必修科目のうち、哲学カフェに関する対話型の授業の受講抽選に外れた学生が、それを翻案して「ならば自分たちで類似の場を作ろう」と哲学に関する自主研究発表会を発案した。つまり、この取組は出発点に哲学プラクティスを持ち、その流れを汲むものである。この発起人の学生から筆者は当初より相談を受け連携していたが、今回改めて聞き取りをオンラインにより行い(1)、本人の承諾を得た上で本稿を執筆している。学生が卒業や単位のためでない自らの動機に基づいて哲学や思想の研究をすることを以前から望んでいた筆者は、会の実現に向けて教室や機材を確保し支援することにした。2018 年 2 月には、哲学を専攻する学生を中心として会を開催できる数の発表希望者が集まり、新入生の参加も見込める 4 月に第 1 回を開催し、西洋近代哲学、中国思想、宗教学などを研究する 7 人の学生が登壇した。その後、2021 年 7 月までに第 9 回まで開催されている。

当初は漢字だけのかなり堅苦しい名前の会だったため、呼びやすく親しみやすい名前を付けることを、筆者は発起人の学生に提案した(2)。悩んだ末に付けられた「哲つくば」という名称は、大学や教育組織の公式の授業や取組でない学生の自主研究企画という趣旨を体現したものとなっただけでなく、同じ大学の他の教育組織に所属する学生が触発され、類似の名前を付けた同様の自主研究発表会が後述のように次々と生まれていく要因ともなった。特に、この名前はシンプルながら可読性が高いことで SNS のハッシュタグとしても力を発揮し、学生間でのシェアによる広報だけでなく、発表会中も参加者によるコメント

や質問に効果を上げている。新型コロナウイルス感染症が流行して対面での学生の活動が制限され、会も 2020 年 4 月の第 6 回から全面的にオンライン開催に移行してからは、SNS の役割はさらに増大し、この呼びやすく親しみやすい名称の重要性が増すこととなった。

2.2. プログラムから見る特徴

この哲学自主研究発表会の特徴を、プログラムから見ていくことにしよう。第 1 回のプログラムは発起人の学生の手元にも正確な形では残っていなかったため、第 3 回のプログラムを以下に表として挙げる。10 人程度の学生が登壇する約 3〜4 時間（概ね土曜日か日曜日の午後）の研究発表会という形式が基本で、複数の回に登壇する学生も多く見られた。

表 1　第 3 回「哲つくば」のプログラム（氏名など一部を省略）

・ブラフマンとことば 〜インド哲学概説をそえて〜（人文一年）
・ロボットを生命体とみなす営みと宗教性（人文一年）
・バーチャル Youtuber は 神になり得るのか（情科三年）
・コミュニケーション、自己、他者（生物一年）
・NARUTO と哲学的思考（人文二年）
・哲学の話をしているはずが気が付いたら語彙習得論になっている話（人文二年）
・東南アジアの宗教（人文一年）
・「責任」を考える（人文二年）
・卑小なワタシが尊厳を得るための一つの方法を今、此処で。〜『パンセ』、その他若干の主題に関するちょいなみの瞑想録（人文二年）
・自然保護ってなんだろう（生物資源）
・初学者的 教育制度の哲学（？）（教育一年）

登壇者は 15 分のロング枠と 3 分（後に 5 分）のショート枠に分かれて発表し(3)、主に前者は一定の専門性や研究の蓄積がある学生、後者は専門を異にしつつも哲学に興味を持つ学生や初めての発表という学生に振り分けられている。発起人の学生によれば、発表会のプログラムは単に自由応募を集めて作ったのではなく、聞く側が飽きずに楽しむことができるよう、東西で交互や関連性の高い発表を連続させたり、ロング枠とショート枠をうまく組み合わせたりと工夫し、時にはふさわしい発表者を探すことで、無秩序ではないが堅すぎないバランスを追求していたとのことである。このプログラムからわかるように発表はあくまで各学生が自主的に取り組んでいる内容であって、ロボット倫理といった応用的テーマやポピュラーカルチャーなども見られ、学生それぞれが受講する授業や指導教員によって課されたものではないことがよくわかる。登壇者についても、哲学系を有する教育組織に限定せず哲学に興味のある学生も発表する幅広さを持っている。また、表中では氏名を省略したがハンドルネームでの登壇が認められており(4)、授業を受講し教員から評価を受ける実名の学生という立場でなく、自ら興味を持った哲学のテーマで研究発表し皆で共有するという趣旨が反映されている。すなわち、この会はいわゆる純粋な哲学の研究を高水準で発表するよりも、各自の自発的な興味と問題意識に基づくテーマにより、履修授

業や成績評価といった制約を離れて「哲学する」ことの実践、またそのような学生たちが集うコミュニティとなっていることが大きな特徴と言える。

2.3. 「対話」のための模索

哲学プラクティスにおいて「対話」が重視されることは言うまでもなく、この哲学自主研究発表会に関わる学生たちも、後述するように哲学的対話を徹底した授業で鍛えられていたのだが、そこに「対話」の要素がどのように盛り込まれていたのであろうか。発起人の学生から提供された引き継ぎ資料からは、大学の授業と一線を画して学生が考え相互対話するように施された工夫をいくつも見ることができる。それによると、この哲学自主研究発表会では一般的に行われる口頭での質疑応答をあえて行わず、SNS（Twitter）でハッシュタグを付けて質問を投稿する方法と(5)、登壇者ごとに図 1 のようなレスポンスペーパーが併用され、後者は運営の学生がとりまとめ登壇者に渡していた(6)。これは参加者の反応を見ながら繰り返し改良され、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴うオンライン化まで使用された。

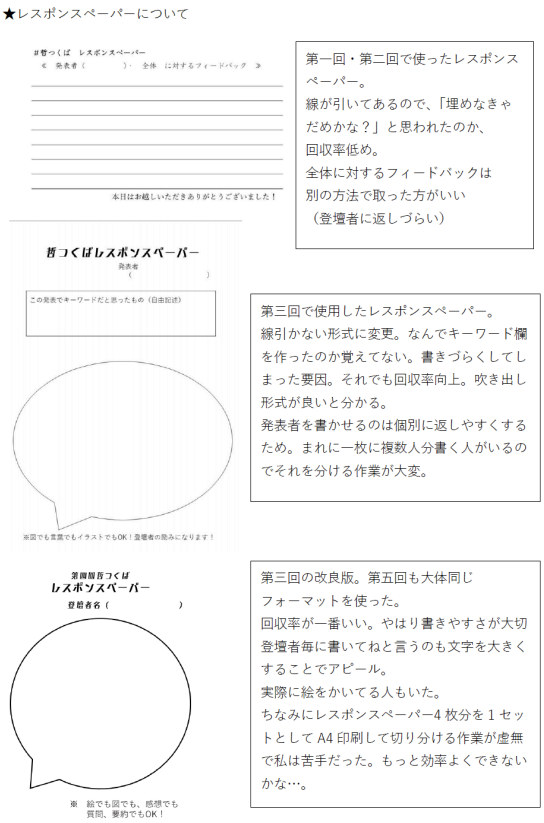

図 1　哲学自主研究発表会のレスポンスペーパー

その場での質疑応答としなかった理由は、学生が運営する会のため進行や時間の管理が容易でないこと、質問が出なかった場合に登壇者のやる気を削ぐと懸念されたこと、上級生が難しい質問を下級生の発表者に対面で行って圧迫感を与えないことなど、ネガティブな気持ちになる参加者が出ないようにして学生の主体的関与やコミュニティの持続性を向上させるためであった。その一方で Twitter 上では運営の学生の努力もあって積極的なコメントや質問が行われ、いわゆるデジタルネイティブ世代の学生が適合しやすい形になっているとともに、この哲学自主研究発表会の特徴を形成している。哲学的な対話と言えば対面でのそれがコロナ禍において難しい場合も多いなか、SNS を含めた各種ツールの活用で対面・同時に限らず「対話」を拡張し(7)、哲学の実践を充実させようとしたこの試みには注目をしてよいのではないだろうか。重要なのは、従来からの対話のあり方を哲学の実践として学んだ学生たちが、教員からの指示ではなく自らの考えでこうした試みを行い、何度も改良して模索していったことであろう。

2.4. コロナ禍への対応とオンライン化に付随した課題

自ら哲学を探究し発表・共有する「楽しみ」を授業や指導とは別の領域で学生が体験する哲学自主研究発表会であったが、2020 年春からは新型コロナウイルス感染症の拡大によりオンライン開催への変更を余儀なくされた。しかし、前述のように当初より SNS を併用

していたこともあって、連絡体制の面でも当日の運営の面でもこの移行は比較的スムーズに行われ、対面開催と同程度の数の学生が参加した。また、発起人の学生が 2021 年 3 月に卒業したため、2021 年 5 月に開催された第 8 回から運営の学生は 2 代目に代替わりした。しかし、オンライン授業が依然として多く学生間の交流にも引き続き制約が課されたため活発な活動の維持は容易でなく 2021 年度以降は苦心と模索の状況にあり、対面で声が響く場における体験の重要性があらわになっている。

2.5. 哲学自主研究発表会を可能にした要因

この実践は学生の趣味的な集まりにも見えるかもしれないが、実績や積み上げられた工夫には学生による哲学の実践として注目すべきところがあるだろう。それでは、何がこうした実践を可能にしたのだろうか。発起人の学生への聞き取りからは、筆者の勤務校で既に行われていた「対話」を重視する哲学の教員と科目の存在が大きな要因となっていた(8)。つまり、知識のインプットだけでない哲学の「プラクティス」を促す土壌と、対話型の哲学の授業で鍛えられた相互の仲間意識や人前で積極的に発言する姿勢が、自主研究発表会を実現し継続する基盤となっていたのである(9)。その一方で、この学生が「哲学の学生にはしゃべりたがり、共有したがりが多いが、授業だと評価として戻ってくる。権力性、非対称性がある」ため、「先生にすり寄らなくてよい。自分が好きだということを言える」場を目指したと語るように、授業とは別枠で形式も大きく異なった場で、自発的な哲学の探究を仲間と共有できるようにした(10)ことも重要な要因と思われる。しかし、むやみに大学と距離を取って学生の仲間内に閉じるのでなく、学生の自主的な活動や研究に対する全学の支援制度(11)には多くの登壇学生が申請して採択され、活用できるものは活用して探究を深化することも行われた。このように、実践型の哲学の授業やそこでの鍛錬と、適切な距離感を保ちながら「自ら実践した好きな研究を共有する」自由な場を実現することの両立が、学生による哲学自主研究発表会を可能にしていた主な要因であったと考えられる。

3. 高大連携への展開

3.1. 経緯と概要

こうした哲学自主研究発表会とそのコミュニティによる実践は、科学コミュニケーションや研究のアウトリーチとも親和性が高いであろう。筆者は科学コミュニケーションの観点も取り入れ、日本学術振興会による科学研究費助成事業（科研費）の児童生徒向けアウトリーチ事業「ひらめき☆ときめきサイエンス」によって「見て触って考える哲学」というテーマで中学生・高校生向けのワークショップを複数回実施した。これには哲学自主研究発表会の発起人の学生にもスタッフとして協力してもらったことから、次のステップとして高大連携版の哲学自主研究発表会を高校で実施する試みも行った。

具体的には、北海道の公立高校と協力し、筆者の勤務校からも実施費用の支援を受けて 2019 年度と 2020 年度に実施した。この高校には哲学を専門として精力的な教育実践を続けている教員が在籍し、哲学自主研究発表会の発表者の一人が高校時代に指導を受けていた縁から連携することとなったものである。2019 年度は特別授業として高大連携版の哲学自主研究発表会を実施することとし、9 月に高校を訪問して 1 年生全員を対象にテーマ設定のためのワークショップを実施した。こうして生徒達が設定したテーマにグループで取

り組んだ発表会を 2020 年初頭に予定していたが、ちょうど北海道で新型コロナウイルス感染症の流行が急速に拡大して高校も長期休校となり中止を余儀なくされた。

この高大連携の取組は 2020 年度も行ったが、連携先の教員が他校に異動して生徒たちもカリキュラムの関係で自主参加となったため、少数の参加者に対してじっくり対応する形に変更した。この年度も対面実施はできず全てオンラインで実施することとなり、オンライン会議システム（Zoom や Google Meet）とオンラインホワイトボード（Miro）の併用でワークショップを行って各生徒に研究テーマを設定してもらい、中間成果を動画で共有してもらった後、オンラインで発表会を行った。

3.2. アンカンファレンスの活用と哲学自主研究発表会へのフィードバック

上記のひらめき☆ときめきサイエンスや高大連携の取組においてアイデア出しや拡張された対話の手法として援用したのが「アンカンファレンス」(12)である。アンカンファレンスは通常のカンファレンスやセミナーと違ってプログラムや講師を事前設定せず、一方向的でなく参加者誰もが主役となって対話することで、参加者の満足度も高められるという特徴を有している。参加者がテーマを持ち寄ってそれらからプログラムを構成し各自の話したいことを共有し議論する形式であるが、本来は一定の素養を持った参加者を前提とするもので、高校生など生徒とともに行う際に向いているとは言いにくい側面もある(13)。そこで、教師が事前設定した内容でなく参加者が皆でアイデアを出してその共有を楽しむという過程と、負担感が少なく発言でき対話しやすい場とすることを重視し、ブロック付箋紙（オンラインで実施した場合はオンラインホワイトボード）に各自の考えを書き出して貼り出し、ファシリテーターがそれらを整理しつつ参加者が発言することで自らのテーマを見いだしていくといういわば簡易版として採り入れた。図 2 はひらめき☆ときめきサイエンスでオンライン実施した際の例で、スタッフとなる学生がファシリテーターを務めて付箋をグルーピングし議論を行っている（2020 年 11 月実施。個人名が記入されているため画像は加工）。多数の付箋が貼られているが、これを実現するには自分の考えを安心して遠慮なく表明できるようにする必要があり、気楽に書けて発展性もあるテーマから始めてそれをアイスブレイクにすることで導入を行っている。それに続いて、自分の考えをキーワードや短い文章でアウトプットしながら、他者と考えを共有し組み合わせることで新たな発見を得るという構成となっている。

図 2　オンラインホワイトボードでのワークショップの事例

このファシリテーションを哲学自主研究発表会の発起人の学生にも行ってもらったこと

で、その後の哲学自主研究発表会では「壁面哲学」と題して A4 版の用紙に「好きなこと・哲学っぽいなと思うこと」を参加者に書いてもらって壁面に貼り出し、研究発表会の休憩中に読んだり話したりしてもらう企画が生まれた。これも先述の拡張された対話に属すると言えるものであり、哲学の領域に属する対話を教室という空間で行った場合、現在の日本の状況ではどうしても生徒や学生は教師に忖度し「正解」を推測することに気を取られがちであることを考えると、有用な手法と考えられる。

3.3. 高大連携における哲学の実践でいかに哲学的な問いを引き出すか

本節で紹介したような高大連携の場面で哲学をテーマに実践を行う場合、どのように中高生に哲学的な気づきをしてもらって問いを引き出すかが鍵になる。そのため、2019 年度の高大連携での実践では、協力学生からの提案でアニメやゲームも題材に取り上げて身近なところから哲学的に考える事例を挙げてもらい、生徒にとってテーマが「与えられた」ものとならず自ら見いだせるよう工夫を行った。このように高校生や中学生が「身近な哲学」の気づきをいわゆるサブカルチャーから見いだすことは、2020 年度の高大連携の際にも見られ、生徒が設定したテーマには、技術の進歩と幸福の相反のように定番とも言えるものがあった一方で、推理小説やサブカルチャーなど身近で触れて心に残っていたことから哲学的な問いが着想される例も目立った。こうした、中学・高校での授業が必ずしも哲学的問いには結びつかない傾向は、ひらめき☆ときめきサイエンスでも度々見られた。この要因として、地歴科に押されがちで公民科の比重が（とりわけ大学入試の際に）低く、公民科においても哲学の比重が高くないことの影響が考えられ、生徒の触れるコンテンツと哲学を接続する工夫や参考資料の作成もこうした実践ではさらに必要と思われる(14)。

2019 年度の事例で言えば、生徒が積極的に意見を出し周囲との対話も促すことはできたものの、対象が高校 1 年生であったためかその場で学問的な思考にまで至ることは困難であり、いかに着想をそれにとどめないで哲学として深めていくかが課題となった。この点については、最終節で再度検討したい。

4. 創造力のある探究の「コミュニティ」(15)として

4.1. 飛び火としての派生

第 2 節と第 3 節の末尾では学生の哲学自主研究発表会やそこから展開した高大連携の実践について要因や条件を検討したが、その哲学的な背景はどのように語られうるだろうか。哲学自主研究発表会についてコミュニティを対面で作ること、高大連携において哲学的な気づきを生み出すことが重要であったことに着目し、本節では広い意味での「創造力」(16)とこうした実践との関わりについて、2 点挙げて考察することにしたい。

まず、筆者の勤務校では哲学と同時期に歴史学の自主研究発表会もスタートし、同様の会が文系・理系を問わず様々な学問領域で連鎖的に立ち上がって十いくつにもなり、「○つくば」という似た名称が付いたこともあって大学内で一定の潮流となっていった。筆者はプラトンを本来の研究テーマとするが、自主研究発表会が学内で次々と生まれていった際の様子は、自らの意思で真摯な研究を行う者たちにおいてあたかもプラトン『第七書簡』で述べられる「知の飛び火」(17)をどこか想起させるものであった。「ソクラテス的方法」で知られるレオナルト・ネルゾンにも参照される(18)箇所を以下に引用してみよう。

そもそもそれは、ほかの学問のようには、言葉で語りえないものであって、むしろ〔教える者と学ぶ者とが〕生活を共にしながら、その問題の事柄を直接に取り上げて、数多く話し合いを重ねてゆくうちに、そこから、突如として、いわば飛び火によって点ぜられた燈火のように, οἷον ἀπὸ πυρὸς πηδήσαντος ἐξαφθὲν φῶς、〔学ぶ者の〕魂のうちに生じ、以後は、生じたそれ自身がそれ自体を養い育ててゆくという、そういう性質のものなのです。（341C-D）(19)

ここで飛び火に喩えられる知が哲学の対象そのものに関わるからには、個別の学問領域に関わるテーマ—まして個々の学生が自主的に設定したテーマ—による自主研究発表会の場合とは事情が全く異なるとはしても、「飛び火」を生じさせるのが知や学問を愛する実践であって話し言葉(20)を交わすことによって行われるという点、また思索ばかりでなく体験の次元が重要であることはおそらく無視できないと考えられる。特に、学生による自主的な研究活動が他の学問領域にも連鎖していわば創発させるという過程が、他ならぬ哲学を起点に始まったことには、哲学の実践が本来持つ創造性という点で大きな意味があるだろう(21)。哲学自主研究発表会のあり方とそこからの創発には、ソクラテス的実践を基盤とする哲学の実践が「ソクラテス文学」(22)を多数触発するとともに、研究・探究の持続的コミュニティがプラトンによって形成されたことや、プラトンのアカデメイアが文献の読解や講義による知識や技法の教示だけでなく、対話を通じた共同探究を重視した場であったこと(23)とも通じるものが感じられる。むろん時代も状況も異なる両者を安易に並べるべきではないが、出発点としての哲学の実践が研究や探究のコミュニティを形成することは、実践としての哲学が自発的・主体的に知を愛し求める営みを行う場を創出し拡大していくという点で重要であろう。また、こうした飛び火としての派生が発生する知的状況が生まれるときに実践としての哲学がその真価を発揮するのだと考えると、話し言葉による体験の次元をいわば口伝にとどめず何らかの再現・持続できる「模像」に定式化することが次の課題として浮かび上がる。

4.2. アン（un）により緩ませること

在籍学生が常に入れ替わる大学で学生が運営するという点でも、前述した持続性の問題がこの哲学自主研究発表会のようなコミュニティには付いてまわり、運営者が短期間で交代し続けなければならないという条件は哲学カフェや子どものための哲学といった実践とは状況を異にしている。このため哲学自主研究発表会では新規参入者のためにハードルを下げる工夫が続けられ、前述のレスポンスペーパーや「壁面哲学」はその一例である。また表 1 のプログラムを改めて見ると、「箸休め」となって場を緩ませる発表も挟まれていることが理解される。発起人の学生の言葉では、「あえて「低い」ものを混ぜて場をなごませ（頭の休憩）、自分でピエロをやった。数学の友人もピエロ概念をよく理解していてやってもらった」とのことである。これは、ともすれば堅苦しい方に傾くこともある哲学の発表会に敢えて—先述のアンカンファレンスにも通じる—「アン（un）」を取り入れ「緩ませる」ことで、活性化と持続性向上を図るコミュニティデザインであるとも言えよう(24)。

その一方、こうした「アン」の要素は、例えばリップマンが提示した探求の共同体にお

ける手法にとっては異質とも言えるものであり、ソクラテスの対話の方法を継承しプラトンが目指した厳密な学としての哲学にもそぐわないと取られるかもしれない。加えて、こうして緩ませることの成否は個人のキャラクターや才覚に依存するところがあり、ノウハウが引き継がれていても再現できるとは限らないというのも確かである。しかし、笑いに対してソクラテスの対話を踏まえた意義を見いだすバフチンに典型的なように(25)「アン」の要素が対話的な哲学の実践には必要であることも確かで、そこから発する創造的な力を哲学自主研究発表会は発揮しようと試行錯誤していたようにも思われる。すなわち、先述の「知の飛び火」が生まれるのにはバフチンが言うならばカーニバル的な対話のあり方—すなわちソクラテスに遡源する対話のあり方—が関わっており、書き言葉よりも話し言葉を重視し「アン」の要素を持つ哲学自主研究発表会はそれを何らかの形で体現しようとしたのだとも言える。様々な触発や刺激をコミュニティで受けながら「楽しみ」を伴った思索を深め自らの探究を他者と声が響く場で共有する体験は、知を探究して生きるといういわば創造的な生—プラトン『ティマイオス』では人間のあるべき生が宇宙創成の反復でもあるとも示唆される(26)—へと人を導くものともなりえ、本稿のような事例は実践としての哲学の可能性をさらに拡張する意義を持つとも考えられる。

5. 結びにかえて

以上、哲学の自主研究発表会を事例として、大学において学生が自ら問いを立てて哲学の実践を行うこととそこからの展開について検討してきた。それにより、今後に向けた課題として、①哲学的な問いを着想する高大連携の取組から自主研究発表会のコミュニティまでどう架橋するか、②学生の自主的な探究コミュニティからの「知の飛び火」を哲学に限らない他領域の高大連携にも波及させうるかという点も浮かび上がってくる。

①については哲学自主研究発表会でも意識はされており、発起人の学生の言葉を借りて言うなら、「武器を渡されて先生に使い方を習う」高校までから「武器を作って人にお披露目する」大学以降の学びに架橋するために、仲間で集まって研究することで自分ならではの「武器」を作るとともに、自分の知らないことを他者との対話から指摘され考えるというトライアンドエラーを繰り返せるコミュニティを地道に作るしかないように思われる。併せて、実践の共有や理論的裏付けによって、架橋の定式化を図ることも求められよう。

②については、教科や専門の壁を越えるのが難しく、現時点では下準備の段階にとどまっている。そのため、個々の領域で個人に依存した単発的な取組でなく、一定の体系性も持った包括的な枠組が必要となるであろう。

こうした課題を乗り越えていくためには、大学のとりわけ初年次教育のあり方に変革が求められることになる。折しも筆者の勤務校では「デザイン思考を涵養するための全学的なチュートリアル教育」(1 年生を主な対象に想定）に向けた検討が 2021 年度より開始され、先述のネルゾンらの「ソクラテス的方法」をはじめ哲学プラクティスの要素に脚光が当たる状況も生まれている。つまり、医学などにおける狭義のチュートリアル教育でなくどんな学問に取り組む場合にも不可欠の、哲学的に根柢から考える実践が求められるわけであるが、それには学生自らが「これを知りたい、考えたい」という主体的な問いを立ててコミュニティで行う探究、すなわち哲学自主研究発表会の事例は示唆を与えうるものと考えられる。その際には、やはり実践を支える理論的な支柱を伴った体系の構築が求めら

れ、本稿で取り上げた古代ギリシア思想—まさに文系・理系はじめ学問が分化する以前—のような源流から問い直す必要があろうが、本稿における事例では部分的な示唆にとどまったため、引き続いての検討と実践が不可欠である。

【註】

(1) 今般の発表と論文執筆に際して、発起人の学生とは 2021 年 8 月を中心に電子メール、およびその前後に音声通話や SNS でのメッセージのやりとりにより聞き取りを行った。

(2) 自発的・創発的なイベントを行うコミュニティにおける名付けの重要性とその実例については、江渡浩一郎、くとの『ニコニコ学会 β のつくりかた』、フィルムアート社、2016 年、44-46 頁。

(3) この哲学自主研究発表会での口頭発表に対応した論文の執筆は前提とされていないが、哲学をはじめとするこれら自主研究発表会と同時期に、参加者が一部重なる形で学生による自主研究発表誌も立ち上がり、大学の公認を得た学生団体として活動している。

(4) 本名でなくても登壇可ということだが完全な匿名ではなく、信頼できる者かは確認されていた。

(5) この手法は、質問やコメントはハッシュタグを付けて Twitter で投稿してもらうという筆者が授業で行っていた実践を発起人の学生が採り入れ、これら自主研究発表会の一つの特徴となった。他の学生の前で発言することへの不安や恐れが大きいことは学生から度々上がる声であり、無秩序にならないコントロールを行った上で匿名でも発言できるようにすることは、いわゆる心理的安全性を担保して積極的な発言と思考を促す上で重要と考えられる。

(6) この方式により、レスポンスペーパーに対して登壇者がじっくり考えた後に Twitter でハッシュタグを付けて回答するなど、その場に限定されない、熟慮を伴った質疑応答が可能となった。一方、他の自主研究発表会では、口頭による質疑応答を主とするところもある。

(7) 時間・空間を越えて対話が拡張されうることについては、対話というプラトンの著作に特徴的な要素が後期著作にかけて一見して後退していくものの、実のところは対話の構造が維持されむしろ徹底されているという指摘が示唆的である。内山勝利「プラトン後期著作における対話性」、内山勝利・中畑正志（編）『イリソスのほとり—藤澤令夫先生献呈論文集—』、世界思想社、2005 年、429-449 頁。また、プラトンの初期対話篇で強調されるソクラテスの対話の精神が後期まで一貫していることについて、田中美知太郎『プラトン II—哲学(1) —』、岩波書店、1981 年、15-35 頁。

(8) その中には課題や指導が厳しいことで学生に知られた科目があり、発起人の学生によると学生間で「ゆるやかなネットワーク、友好関係が生まれ」、受講者間での何気ない会話から哲学研究発表会が着想されているが、「授業の「抑圧」があるからこそ自主探究の欲が出てくる」のだという。

(9) 勤務校の大学では学生が自ら発表会を開催する気風は以前からあり、一時的に盛り上がることもあった。そのため、哲学自主研究発表会の立ち上げにあたって相談を受けた筆者は、発起人の学生に対して一時の盛り上がりでなく持続性を持ったコミュニティを目指すことを提案している。

(10) このことは会の支援者としての筆者も当初から強く意識し、自由闊達な研究発表の場を阻害しないよう、裏方や見守りに徹することとした。特に、登壇学生が筆者の授業の履修者や指導学生である場合も多かったため、登壇の有無や発表内容は成績や評価とは完全に切り離した。

(11) 勤務校の大学では、学生の自主的な活動を公認して支援する制度や、卒業論文／研究に先んじて学生が自主的に行う研究に費用補助を行う研究支援プログラムが全学対象で行われている。

(12) アンカンファレンスは本来テクノロジーに詳しい人々のコミュニティに起源を持つ手法で、哲学など人文系の領域や精通する分野のない参加者での活用は視野に入っていないと言える。

Daniel J. Cohen, Tom Scheinfeldt(eds.), *Hacking the Academy: New Approaches to Scholarship and Teaching from Digital Humanities*, The University of Michigan Press, 2013, pp. 132-137.

(13) 筆者が参画していた科学コミュニケーションやシチズンサイエンスの取組でアンカンファレンスの手法は度々用いられており、議論が活発に行われるとともに参加者の満足度が高いのが特徴的であった。そのため、多くの要素はかなり縮小しながらも「堅くなく自由に話せる楽しさ」を維持するようアレンジをして導入した。江渡浩一郎、土井裕人「共創型イノベーションを創出する—ニコニコ学会βの活動を通じて—」、『情報管理』、59(10)号、2017 年、671 頁。

(14) こうしたテーマを扱った著作として、永井均『マンガは哲学する』、岩波書店、2009 年（原著 2000 年）など。隣接する宗教学では井上順孝（編）『映画で学ぶ現代宗教』、弘文堂、2009 年をはじめ、宗教文化教育の教材という観点で、今日の各種コンテンツの活用が積極的に行われている。

(15) ここで取り上げるコミュニティは、リップマンが提唱したような「探求の共同体（community of inquiry）」とは文脈や趣旨が異なる。マシュー・リップマン、河野哲也・土屋陽介・村瀬智之（監訳）『探求の共同体—考えるための教室—』、玉川大学出版部、2014 年、117-183 頁、Matthew Lipman, *Thinking in Education*, Cambridge University Press, 2003(2nd ed.), pp. 83-124.

(16) 本稿での「創造力」は、リップマン、前掲書、第 11 章で取り上げられるような創造力よりも広く、また後述する後期プラトンのように人間の領域にとどまらない視野を含むものと捉えたい。

(17) ディオニュシオス 2 世との経緯を背景に、書き言葉と話し言葉の位置づけが語られたこの箇所については、Ludwig Edelstein, *Plato's Seventh Letter*, E. J. Brill, 1966. pp. 76-85.

(18) Leonard Nelson, *Die Schule der kritischen Philosophie und ihre Methode*, Felix Meiner, 1970, S. 271.

(19) プラトンのギリシア語テクストは John Burnet, *Platonis Opera*, vol. 5, Oxford, Clarendon Press, 1907 に、日本語訳文は田中美知太郎・藤沢令夫（編）『プラトン全集』、第 14 巻、岩波書店、1975 年に拠る。〔〕は訳文における補足で、傍点は省略した。

(20) 書かれた言葉と「生命をもち、魂をもった言葉」との対比については、プラトン『パイドロス』275C-276A がよく知られている。

(21) 自発的にメンバーが集い科学コミュニケーションの趣旨を持つ学術コミュニティが他のコミュニティを派生させていった他領域での事例として、「みんなが科学者になる」ビジョンを掲げユーザー参加型のアカデミアを目指したニコニコ学会βが挙げられる。江渡ら前掲書、151-153 頁。

(22) これについては、納富信留『哲学者の誕生』、筑摩書房、2005 年、148-202 頁など。

(23) プラトンのアカデメイアにおける共同での探究の重視については、廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』、講談社、1999 年、193 頁（岩波書店、1980 年、174-175 頁）を参照。

(24) 哲学自主研究発表会の発起人の学生には先述のニコニコ学会βからの間接的な影響があり、領域横断的コミュニティによる科学コミュニケーションの視点が加わっている。ニコニコ学会βでも、背景や所属を異にしながら一定の素養を持つ人たちによる「アン」が妙味となっていた。

(25) ミハイル・バフチン、望月哲男・鈴木淳一（訳）『ドストエフスキーの詩学』、筑摩書房、1995 年、265 頁。ただし、筆者の問題意識として、バフチンが中期以降のプラトンにおける対話をあまり重視していないことには再考が必要という立場にある。

(26) プラトン『ティマイオス』では例えば 88D-89A であるが、宇宙創造に関わる知性のあり方に人間が倣うべきという主張を重視すべきと考えられる。

【謝辞】本稿の執筆にあたって、「哲つくば」発起人の片山千波氏には、資料提供を含めて多大なご協

力を頂いたことを感謝いたします。